うろん紀行

目次

_28550179.indd 2-1 2021/07/02 13:19:17

第一章　海芝浦
……笙野頼子『タイムスリップ・コンビナート』　5
第二章　東向島
……永井荷風『墨東綺譚』　15
第三章　犬吠
……古川日出男『ベルカ、吠えないのか？』　27
第四章　蕨、上野、亀戸、御茶ノ水
……後藤明生『挟み撃ち』　37
第五章　河口湖
……太宰治『富嶽百景』　49
第六章　金沢文庫
……高橋源一郎『さようなら、ギャングたち』　67
第七章　馬喰町
……宮沢賢治『銀河鉄道の夜』　81
第八章　池上
……尾崎翠『第七官界彷徨』　93
第九章　産業道路
……大江健三郎『万延元年のフットボール』　105
第十章　高輪ゲートウェイ
……牧野信一『ゼーロン』　119
第十一章　ニューヨーク
……ポール・オースター『ムーン・パレス』
ベン・ラーナー『10:04』
スコット・フィッツジェラルド『グレート・ギャッツビー』　131

_28550179.indd　2-3　2021/07/02　13:19:17

うろん紀行

第十二章　？？？
……猫田道子『うわさのベーコン』
夏目漱石『夢十夜』
J・L・ボルヘス『バベルの図書館』　143

第十三章　両国
……小森健太朗『大相撲殺人事件』　155

第十四章　落合南長崎
……藤子不二雄Ⓐ『まんが道』　169

第十五章　大井町
……トム・ジョーンズ『ロケットファイア・レッド』　181

あとがき　194

_28550179.indd　4-5　2021/07/02　13:19:17

第一章

海芝浦

……笙野頼子『タイムスリップ・コンビナート』

_28550179.indd 6-5 2021/07/02 13:19:17

第一章

海芝浦

そこは、駅の一方が海なのだという。ではもう一方はどうかというと、東芝だ。そのような不思議な駅の存在を、わたしは笙野頼子『タイムスリップ・コンビナート』によって知った。いつか行きたいと漠然と思いながらも、行き方を調べることはなかった。

友田さんに連載の話を持ちかけていただき、どことも知れぬ駅に行ってなにかを思うという本連載が決まった。であるならばいい機会だと思い、海芝浦駅に行くことにした。

『タイムスリップ・コンビナート』は小説だ。マグロと恋愛をする不思議な夢を見ていた折に、誰とも知れぬ人から電話がかかってきて海芝浦駅まで行ってしまう、という話で、道中現れる景色は、語り手に幼少期を過ごした四日市の風景を思い出させる。しかし記憶は曖昧なまま、結局のところたどり着いたのは行き止まりの駅にすぎないことに気がつく。わたしは昔、二年間だけ製鉄所のある港町に住んでいたことがあり、どこか他人事に思えなくて、この小説が好きなのだ。

作品の追体験の機会を与えてくれた友田さんは、作中における誰とも知れない電話の主か。それとも触れると爆発するマグロか。わたしはまだ友田さんに一度しか会ったことがない。

海芝浦駅へはＪＲ鶴見線で行くことができる。路線図を見てもらえばわかるが、鶴見線はフォークのようになっていて、どん詰まりの終点がいくつかある。そのうちのひとつが海芝浦駅だ。鶴見駅のさらに奥、黄色い看板を目印に改札内から、もうひと階層深く改札をはいると、そこが鶴見線のホームだ。わたしは古びた車両に乗り込み、若草色のシートに背をもたれさせ

_28550179.indd 6-7 2021/07/02 13:19:17

た。毛の密度が粗く、経てきた年月を感じさせる。しばらくして電車は動き出した。何も考えず乗り込んでしまったが、この列車は海芝浦行きではないから、浅野駅で乗り換えをしなければならない。

何分か揺られて着いた浅野駅は、無人駅だった。申し訳程度に改札機が立ててあるが、いくらでも無視することができそうだ。ここで何分待てばいいのか。えっ、四十五分。自動販売機に温かい紅茶はなかった。かわりに冷たいブラックコーヒーを買って飲んでいると、にわか雨が降ってきた。勢いがあったがすぐに止んだ。目の前は線路だというのに、成人の腰の高さくらいある、麦によく似た草が生い茂っている。遠くには子猫を咥えた巨大な親猫が描かれた倉庫。資本主義の終末か。郷愁に浸るふりをしながら、文庫本を開きひまを潰す。

大きなカメラを抱えた少年が、こちらの様子をおずおずと探るようにしながら、線路のほうを向いてシャッターを切っていた。鉄道が好きなのだろうか。でもいま電車はいないし、このシンプルな駅にそれだけの価値があるのかわからない。そもそも、あの子は本当にこの世にいる存在なのだろうか。でもきっと向こうも、わたしに対して同じことを思っているよな。こっちはカメラすら持っていないのだし。よほどこの場にそぐわないに違いない。そんなことを考えているうちに、少年はどこかへ消えてしまった。こんなにもない駅からいったい、どこへ。

めぇぇぇぇぇぇぇ。

海芝浦

べぇぇぇぇぇぇぇ。

呼応しあう生き物の声が聞こえる。ヤギだ。ヤギがなぜこんなところに。どうやら浅野駅からさほど遠くないところに公園があり、そこで飼われているらしかった。鳴き声のした方角に、白い四本足の獣がいる。どうやらあれがヤギだなと見定めた。そういえば沖縄の人ですら滅多にヤギ汁を食べないと聞いているが、本当だろうか。すると、今度は雨が降ってくる。もう何が何だか、いよいよわけがわからなくなってきた。

ようやっと海芝浦行きの電車が、ゆるやかな弧を描きつつやってきた。三両編成だった。最果てに行くというのに、大層な身分である。

海芝浦行きはぽつぽつと乗客がいた。全員で十数人ほどだろうか。まさか全員が東芝の社員というわけでもあるまい。電車はスピードをあげた。わたしは半身にかかるGを感じながら、流れる景色をぼんやり見ていた。途中駅で乗客の三分の一ほどが降りた。扉が閉まり発車すると建物はどんどんと離れていき、窓を占めるものは空と海ばかりになる。それなのに、不思議と景色は無機質さを増していくように思えた。

ついに海芝浦駅に到着した。駅のホームは、フェンスの取り付けられた細長いアスファルトという印象だ。幅は二メートルほどしかない。黒のフェンスの向こうはもちろん、海だ。ぞろぞろと乗客が降りる。老夫婦は先に降りたほうが手を差し伸ばし、もう一人を支えていた。

_28550179.indd 8-9 2021/07/02 13:19:18

真っ黒に日焼けをした、トライアスロンの選手のような格好をした中年男性がいる。子供を三人つれた家族は、幼い末っ子以外元気がない。それに、傘を差したまま、列車に出たり入ったりを何度も繰り返す眼鏡の男。

わたしは最後に降りた。ここが海芝浦駅？　そう、ここが海芝浦駅。夢見た「タイムスリップ・コンビナート」。白く濁る空と海、そしてコンビナート。煙だけが朱色をしていた。右手に見える巨大な吊り橋の名は、鶴見つばさ橋。吊り橋なんてあの小説に出てきただろうか。

電車がやってきた方向に道はなかった。わたしはふらふらと取り憑かれたように前進した。左手側のフェンスは板でできたホームらしいものに変わった。屋根はついているけれども、柱の隙間からあいも変わらず海が見える。波が揺れている。進むと右手側に改札が見える。ラミネートされた張り紙に、ここから先は東芝なので撮影はお断りしますと書いてある。植え込みがいくつかある。トライアスロンだけが颯爽と社屋へと消えていった。まさかあなたが東芝だったなんて。

前方に一般客向けの改札が現れる。一般客向けの改札だって？　そんなものは、あの小説には出てこなかった。一本足の改札機をピッとやると、屋根がいつのまにかなくなっており、そこは公園になっていた。人と人がすれ違うことにすら困難を覚える、細長い公園。本来あるべきでないところに無理やり作るからこうなるのだ。あたりには、訪れる人々が四季を感じることができるよう、樹木が植えられていた。花をつけているものもある。それに、恋人たちが愛

海芝浦

を語らうのに御誂(おあつ)え向きの、プラスチック製のベンチまで。

さきほどまで乗客だった人たちは、手持ちのデバイスで写真を撮ったり花を愛でたりしていた。

「お父さん、昨日ＮＨＫで見たとおりね」

老婦人がそう言った。ふうん、やっぱりこの駅はテレビでやるんだ。それにしてもタイムリーだ。わたしは手持ち無沙汰な気がして、iPhone で写真を撮った。ほぼ真っ白の、なんてことはないつまらない写真が何枚か撮れた。

なんか思ってたのと違ったな。雨に濡れ、とてもではないが座れそうにないベンチを見やりわたしは思った。わたしが行きたかったのは最果ての地、結局どこにもたどり着くことができないのだという絶望をひしひしと感じさせてくれるところ。『タイムスリップ・コンビナート』における海芝浦駅は、まさにそういった場所として機能していた。だがどうしようもなくレジャー感、あるいはアミューズメント感が漂っていた。わたしはたどり着いてしまっていた。それにつけても人が多い。ここはぎりぎり、家族で来てしまえる場所だなという気がした。ランチボックスを持って来れば、ちょっとした行楽ができてしまうだろう。まだお互いが好意を持っていることを知ったばかりの恋人たちであったら、この光景を前に二、三時間はベンチで語らうことができるはずだ。それはいいことなのだけれども、かえってわたしはさみしさを覚えた。恥ずかしげもなく真一文字の姿を晒す吊り橋、あれはいつ作られたのだろう。公園がで

_28550179.indd　10-11　　2021/07/02　13:19:18

きたなんて知らなかった。『タイムスリップ・コンビナート』が発表されたのは一九九四年。四半世紀という年月が、海芝浦駅の景色を変えていた。

それに、つや消しの加工を施された銀色の改札はどこにあるのだろう。柔らかなフォルムを持つ近未来の改札。それに、真っ昼間だというのに煌々と光を放つ、迫り来る城塞のような工場は。そんなものはどこにもありはしなかった。本物の海芝浦駅にもなかったし、『タイムスリップ・コンビナート』のどこにも、そのような描写はなかった。それらは、わたしが勝手に作り出していたものだった。わたしは何を読んでいたのだろうか。わたしはたしかに、繰り返し『タイムスリップ・コンビナート』を読んでいたはずだ。そのたびごとにわたしの精神は、得体の知れない郷愁とともに海芝浦駅に転送されてきたと思っていた。でもわたしが、連なる文字たちに連れてきてもらったと思っていた海芝浦駅は、わたしの頭が勝手に作り上げたまぼろしだった。記憶や他のフィクションとごちゃまぜになり、全く別の海芝浦駅ができあがっていたのだ。わたしの頭のなかにはたしかに海芝浦駅が存在していたのだが、それは本物の海芝浦駅とも、『タイムスリップ・コンビナート』の海芝浦駅とも、かけ離れたものになっていたのである。

『タイムスリップ・コンビナート』の海芝浦駅、現在の本物の海芝浦駅、そしてわたしの頭のなかの海芝浦駅は全て異なっており、それらは決して交わることのないねじれの位置に存在していた。わたしは明らかに注意深さが欠如しており、自分の楽しみを優先した身勝手な読者

海芝浦

だった。海芝浦駅は無言のまま、わたしにそのことを無慈悲にも告げていた。

でももしかしたら、小説とはそもそもが、そういったものなのかもしれない。まるで電化製品の取り扱い説明書のように、懇切丁寧な描写がなされていても、読者は違うところにたどり着いてしまうのかもしれない。記憶や肉体が、さまざまなものが邪魔をするからだ。であるならば、人はなぜ小説を書くのだろう。なぜ小説を読むのだろう。それは無謀な試みなのに。決して同じ場所にたどり着くことはできないのに。小説は、本当は、読まれるときの現象としてしか存在し得ないのだ。意味を持つ文字が連なって印刷された本が、行儀よく本屋や図書館やあるいは自室の本棚に並んでいるとき。そのときには、それは小説でないのだ。読まれてはじめて小説は生まれる。けれども、小説が読まれるというその現象は、読者によって、時と場所によって、違うのだ。再現性は不確かなのだ。であるならどうしてわたしたちは、同じ小説を読んだふりをして語らったりするのだろう。

電車がもう出るという。わたしはここに取り残されるわけにはいかない。そう思って、のろのろと歩き出す。車掌が二人、なにを話しているのか楽しげに笑いあっていた。わたしは慌てて乗り込んだ。もう次の場所へ、行かなくちゃ。

_28550179.indd 12-13 2021/07/02 13:19:18

参考文献

1．笙野頼子『笙野頼子三冠小説集』（河出文庫、二〇〇七年、『タイムスリップ・コンビナート』を収録）

第一章

海芝浦

_28550179.indd 14-15 2021/07/02 13:19:18

第二章

東向島

……永井荷風『濹東綺譚』

_28550179.indd 16-17 2021/07/02 13:19:18

第二章

東向島

浅草駅から東武スカイツリーラインに乗ると、スカイツリーは早々に過ぎ去っていく。巨大なマイナスドライバーのようなそれを背に、わたしは浅草駅から三駅の東向島駅へと向かった。

東向島駅は、かつては玉ノ井駅という名前だった。玉ノ井、すなわち玉の井は関東大震災後から一九五七年の売春防止法施行まで栄えた色街であり、永井荷風『濹東綺譚』の舞台だ。「わたくし」こと初老の作家大江匡と私娼のお雪が心を通わせるひとときが描かれた、昭和初期の新聞小説である。

個人的な話で恐縮だが、永井荷風と『闇金ウシジマくん』が頭のなかでセットになってしまって久しい。『闇金ウシジマくん』には、仕事での地位も家族も失った男が

「俺は金もないし休日は会う人間が一人もいないけど、大好きな永井荷風の行きつけの蕎麦屋巡りとかして充実してる。趣味の世界に移住するわ。」

と打ち明けるエピソードがある。社会からつまはじきにされ、落ちるところまで落ちても、教養は精神の滋養になりうるのかという救いが示される回だ。

また、永井荷風は関根歌という妾と一緒に暮らしていたとき、口淫の悦楽追求のために歯を全部抜かせたという。一方、『闇金ウシジマくん』では、ありとあらゆるむごいことをやってきた悪党が歯を全て抜かれて山中に埋められる回があるのだが、十年以上前にインターネット

_28550179.indd 18-19 2021/07/02 13:19:19

で、その回について「埋められる直前にフェラ奴隷にされた説」を唱えていた者がいた。そのこともあって、永井荷風と『闇金ウシジマくん』が、わたしにとって不可分のものになってしまった。

東向島駅は改札がひとつだけの小さな駅だった。構内を出てすぐマクドナルドとドトールがある。自転車に跨った女子小学生が、ピンク色の口紅を塗っておめかしをしていた。

さっそく荷風が通い詰めたあたりを散策してもよかったのだが、お昼時である。蕎麦屋ではなくカツ丼屋でもなく、事前に調べていた食べログ評価の高い洋食屋のある反対方向へと歩き出した。炎天下に汗をぬぐいながら隅田川のほうへと歩みを進める。川の向こう側は南千住らしいが、わたしは地理に疎いのでよくわからない。

洋食屋は清潔で広々としていたが、平日なのにもかかわらず夏休みだからか家族連れで席はほとんど埋まっていた。一人でいるとどことなく居心地が悪い。なんともないような顔をしてカウンターに座り、（B）120gステーキ定食を注文した。税込一〇五〇円。現在の消費税率は8％なのだが。

ビフテキは美味しかった。大きめにカットし、力強く噛みしめると口いっぱいに肉汁が広がる。上顎から脳天へ突き抜けていく馥郁（ふくいん）たる肉の香り。やはり歯は大事だ。たとえ多額を払い身請けした芸妓であろうと、歯を全部抜かせるのは鬼畜の所業だという気がする。ポリグリップのようなものもないだろうし、煎餅も口のなかでふやかして食べないといけないだろう。

東向島

Google の画像検索によれば、まだ男盛りの荷風のとなりにいる関根歌は、ほっそりとして眼鏡をかけた知的な美人で、現代に生まれていればフリーアナウンサーにでもなっていたかもしれない。そのまま関連画像を見ていくと、ダンサーをはべらせてにんまりとした笑みを浮かべる狒々爺（ひひじい）然とした荷風。幸せそうだ。狒々爺の写真をいくつも辿っていくと、あいた荷風の口に前歯がない。あれ、もしかして。いや、そんなまさか。

ビフテキに満足して店を出ると、早速散策を開始した。熱風に吹かれあっという間に額から汗が滴り落ちる。蚊に食われたような気がして二の腕のあたりをひっかいたが気のせいだった。

戦前の玉の井は建物がごちゃごちゃと立ち並び、複雑な道を形成していたという。荷風が「ラビラント」と形容したその一帯は空襲で焦土と化し、当時の道はほとんど残っていない。だが現在の東向島も小さな道が入り乱れ、十分に迷宮である気がした。当たり前だが現在、売春は違法であり、この街でおおっぴらに春をひさぐ女たちはいない。今の東向島は道がややこしいだけの住宅街だ。新築の住宅も多い。

私娼窟には、銘酒屋（めいしや）あるいはカフェと呼ばれる店が軒を連ねていた。一階が飲食店の体をなしているが、その実二階が本体で、女給が本番行為をするのだ。彼女たちは二階の飾り窓から手を振って、お兄さんちょいと遊んで行きなよ、などと声をかけたらしい。戦後、空襲で焼け落ちてからも玉の井にはまたカフェが建てられ、今度は赤線地帯となった。ということはすなわち、赤線廃止以前に建てられた築六十年以上で、かつ一階部分が店舗になっていて二階に飾

_28550179.indd 20-21 2021/07/02 13:19:19

り窓のある建物が、カフェであった可能性のある建物ということになる。荷風が通い詰めた時代の建物は残っていなくとも、せめて戦後に建てられたものでもいいから、かつてカフェであった建物を見てみたい。

うねうねと入り乱れた複雑な小道を、飾り窓、飾り窓、と念じながら歩く。強い日差しに朦朧としてくる。また行き止まりだ。あのかすみ草を象っているようなフレームは飾り窓と呼べるのか。いやでも築六十年には見えない。この建物は？　たしかにトタン葺きで築年数はありそうだが、窓枠はただのアルミサッシで飾り窓とは言い難い。そもそも考えてみれば、世の中の個人商店はほとんどが一階を商店、二階部分を住居とするのではあるまいか。どの家もカフェであったように思われるし、そうではないようにも思われる。わたしはこれぞ、という飾り窓を探して東向島をさまよい歩いた。よその家の窓ばかり覗いて、これではさながら空き巣である。いま巡査に尋問されたらどう答えればよいのか。へっへ、飾り窓を探していまして、と下郎口調で答えたら、はたして巡査は解放してくれるのだろうか。

お雪は氷を一匙口へ入れては外を見ながら、無意識に、「ちょっと、ちょっと、だーんな。」と節をつけて呼んでいる中、立止って窓を覗くものがあると、甘えたような声をして、「お一人、じゃ上ってよ。まだ口あけなんだから。さア、よう。」と言って見たり、また人によっては、いかにも殊勝らしく、「ええ。構いません。お上りになってから、お気

東向島

に召さなかったら、お帰りになっても構いませんよ。」と暫くの間話をして、その挙句これも上らずに行ってしまっても、お雪は別につまらないという風さえもせず、思出したように、解けた氷の中から残った白玉をすくい出して、むしゃむしゃ食べたり、煙草をのんだりしている。([1] p.80)

かつてカフェであったのではないかと思えるような建物はあった。だがその建物は表札がかけられ、住宅や個人商店として使われていた。カフェの面影を必死で隠し住宅街に埋没せんとするようなその立ち姿は、かつて芸妓であったことをひた隠しにする年配の女性を思わせた。iPhoneを掲げたものの写真を撮るのは気がひけ、わたしはそっと立ち去った。

『墨東綺譚』に描かれた玉の井は、人々が活き活きとして、清貧の魂が根付くささやかな楽園のようだ。しかし本物の玉の井は、美しいだけの場所ではなかったらしい。『墨東綺譚』でも蚊の多さと溝の臭気の描写があるが、『玉の井 色街の社会と暮らし』[2]によれば、当時の玉の井では下水道はまだ整備されておらず、生活排水がどぶにそのまま流されていたという。糞尿から立ちのぼる臭いとそれを消すための消臭剤が混ざりあった臭い。お雪はその臭いに囲まれて氷白玉を食べたのだ。

戦前の玉の井を知らない人間からすれば、『墨東綺譚』においては失われた昭和初期の叙情がありのままに再現されているように思える。だが、荷風は玉の井の暗部を控えめに書いたは

_28550179.indd 22-23 2021/07/02 13:19:19

ずだ。当時の読者にとって、玉の井が楽園とは程遠い地域であることは明らかだったからだ。『墨東綺譚』は書かれたときからすでにファンタジーだった。

> 墨東綺譚はここに筆を擱くべきであろう。然しながら若しここに古風な小説的結末をつけようと欲するならば、半年或は一年の後、わたくしが偶然思いがけない処で、既に素人になっているお雪に廻り逢う一節を書添えればよいであろう。猶又、この偶然の邂逅をして更に感傷的ならしめようと思ったなら、摺れちがう自動車とか或は列車の窓から、互に顔を見合しながら、言葉を交したいにも交すことの出来ない場面を設ければよいであろう。楓葉荻花秋は瑟々たる刀禰河あたりの渡船で摺れちがう処などは、殊に妙であろう。（[1] p.93）

物語の幕引きが、わたしたちをファンタジーの世界から現実へと引き戻す。本を閉じた途端にわたしたちは、ラビラントの玉の井から道が整備された清潔なつまらない街へと帰ってくる。『墨東綺譚』の玉の井は汚い部分に目をつむり美化された近代だ。言葉によって永久に封じ込められた標本だ。

永井荷風はエリートとして生まれ、細胞のひとつひとつに戯作文学と教養と階級が染み付いている。わたしたちは荷風の描く近代を想像することはできても、生きることはできない。自

東向島

分の快楽のために愛人の歯を全部抜かせるなんて、そうそうできないだろう。でも荷風にはできる。荷風の生きた近代において人間は平等ではなかったからだ。荷風にとって妾はあくまでも愛でるためのもので、彼女の生活上の不便なんてどうでもよかったのだろう。そういった傲慢さを傲慢であると思いもしない人間にしか『墨東綺譚』を書くことはできないのではないか。

> 建込んだ汚らしい家の屋根つづき、風雨の来る前の重苦しい空に映る燈影を望みながら、お雪とわたくしとは真暗な二階の窓に倚って、互に汗ばむ手を取りながら、唯それともなく謎のような事を言って語り合った時、突然閃き落ちる稲妻に照らされたその横顔。それは今も猶ありありと目に残って消去らずにいる。わたくしは二十の頃から恋愛の遊戯に耽ったが、然し此の老境に至って、このような癡夢を語らねばならないような心持になろうとは。（[1] p.94-95）

いま『墨東綺譚』が読まれるときに表出する玉の井は、現代の語彙でおそるおそる組み立て上げたはりぼてにすぎない。『墨東綺譚』の玉の井はファンタジーなのだし、近代はもうどこにもない。それは絶望的なことにも思えるが、わたしは何度でもウシジマくんやビフテキを元にして玉の井の再現を試みる。どうにか引き寄せてみようとする。

東向島の探訪から幾日かが過ぎた。わたしは、どの街へ行っても、一階が店舗で二階部分が

_28550179.indd 24-25 2021/07/02 13:19:20

住居の建物を見るたびにぎょっとしてしまうという奇癖に悩まされるようになった。二階の窓から、若いのに白粉焼けをした、だがしかしからりと明るい表情の女性が手まねきしてやいないか。臭気で満ち、蚊でいっぱいの玉の井へわたしを連れて行ってくれやしないか。『墨東綺譚』は、わたしの目に映る現在の景色を変えたのだ。

参考文献

1. 永井荷風『墨東綺譚』（新潮文庫、二〇一一年）
2. 日比恆明『玉の井 色街の社会と暮らし』（自由国民社、二〇一〇年）
3. 真鍋昌平『闇金ウシジマくん17巻』（小学館、二〇一〇年）、『同29巻』（小学館、二〇一三年）

第二章

東向島

_28550179.indd 26-27 2021/07/02 13:19:20

第三章

犬吠

……古川日出男『ベルカ、吠えないのか？』

_28550179.indd 28-29 2021/07/02 13:19:20

第三章

犬吠

苦い思い出がある。十七歳のとき、おもしろいからと押し付けるように友人へ本を貸した。古川日出男の『ベルカ、吠えないのか？』だ。二人称の語りかけるような文体で、戦争と運命に翻弄される犬たちの二十世紀が語られる同書に、わたしはすっかりはまっていたのだ。絶対に楽しんでもらえるだろうと思っていた。

彼女はひと月後、おずおずと本を返してこう言った。

「ごめん、無理。読めなかった」

ショックだった。その子は本が好きで、わたしは彼女に、カポーティや村上春樹を貸してもらったことがあったのだ。でもわかってもらえなかった。じゃあ誰にわかってもらえばよかったのか。

わたしの高校は当時、全校生徒を合わせると千人くらいいたはずだが、そのなかに『ベルカ、吠えないのか？』を読んだ人はいたのだろうか。わたしの仲間は、そこに一人くらいはいたのだろうか。うぉん。十年以上前のことだが思い出して悲しくなり、わたしは遠吠えがしたくなった。うぉおおおおおおおん。犬を真似て遠吠えをするなら、犬吠埼（いぬぼうさき）に行くのがいいだろう。そうだ、犬吠埼に行こう。

犬吠埼はわたしの生活圏からかけ離れている。なにしろチーバくんで言えば耳の先だ。片道三時間半はかかる。直通バスもあるが、電車を乗り継いで行く。

千葉駅まではそれほど遠くに感じなかった。だが総武本線に乗り換えてからが果てしない。

_28550179.indd 30-31 2021/07/02 13:19:20

街は過ぎ去っていき、住宅地が現れる。家、家、家、家、そして田んぼ。田んぼ、田んぼ、田んぼ、田んぼ、畑、田んぼ、畑。すこし寝る。そうしてわたしは総武本線の終点、銚子駅へ着いた。ここから銚子電鉄に乗り換えるのだ。

駅を出て右と左のどちらに行けばいいのかわからず、案内板を見ると、改札を出ずに2・3番線のホームを進んでくださいとあった。指示に従うと、水色と青の車体が奥に見えた。二両編成だ。銚子電鉄はなんと、まだ電子マネーに対応していないらしく、乗り込んだあとに車掌さんに直接お金を支払い切符を買う。お釣りでもらった五百円玉が、見たことがないくらいに酸化しており、怪しく虹色に光って宇宙を思わせる。

車両は古びていた。赤紫色の座席のシートも、スプリングが劣化しているのかなんだかぎこちない。小さな車体が走り出すと、蛇腹状の連結部分がちぎれそうなほど軋んだ。連結部分を覆うベージュのカバーは、ところどころ錆の色がうつって赤茶けている。横転したら嫌だなと思いながらも、はやる気持ちを抑えられない。古いものがメンテナンスされながら動いているのを見るのが好きだ。

線路脇すぐのところに木が何本も植えられている。その木から伸びる枝が窓ガラスをなでるので、ぴしぴしという不穏な音が始終、車内に響いている。剝き出しの蛍光灯が何度か点滅した直後、犬吠駅に着いた。

第三章

犬吠

犬吠駅は平面的な白いアーチがあり、舞台の書割のようだ。ポルトガル風らしい。移動時間が長かったのでお腹が減っていることに気がつき、売店でぬれ煎餅を買う。ぬれ煎餅を食べると必ず普通の煎餅が食べたくなるのはわたしだけだろうか。そう思いながら、犬吠埼へと歩き出す。

道中、人間にリードをひかれ散歩する真っ白な老犬とすれ違った。耳が垂れているので洋犬だろう。ラブラドールだろうか。

祖父の家でも白い犬を飼っていたことを思い出す。小さな雑種の雌犬だった。アイヌ犬の血を引いていて、その証拠に舌に紫色の斑（ぶち）があった。アイヌ犬は猟犬だから、熊にも立ち向かう勇敢さを持つ。その犬もそういった資質を受け継いでいたが、祖父は犬のしつけをちゃんとするような人ではなかったので、勇敢さは別の形で表れていた。チコちゃんというその犬はいつも吠えていて、人間にも容赦なく噛み付いた。噛まれた手には米粒大の小さな穴があいた。孫が血を流しているのを見た祖父は怒り、素手や時には角材でチコちゃんをぶった。だがチコちゃんは怯えるということがなかった。鎖に繋がれてもなお恐ろしい犬だった。チコちゃんはある日、血を吐いて死んだ。

チコちゃんの次に祖父が飼ったのは大きな雑種の赤犬だった。柔和な顔立ちで、由仁町からもらわれてきたのでユニちゃんと名付けられていた。ユニちゃんはおとなしく賢かったので、子どもが仕込む雑なお手にも従った。

_28550179.indd 32-33 2021/07/02 13:19:20

ユニちゃんは突然子犬を六匹産んだ。それなりにかわいがられていたが、妊娠に誰も気がついていなかった。誰に教えられたというわけでもないのに、ユニちゃんは孤独にお産を済ませ、胎盤と一緒に産んだばかりの末っ子も食べた。そうしてけろっとしていた。かわいらしい子犬たちはもらわれていき、ユニちゃんはまた一匹になった。そして脱走した。手分けをして探しても見つからなかったが、よく似た犬を近所の人が連れているのをおばが見つけた。おばが犬を見ていることに気がついたその人は、気まずそうに立ち去ったという。それからユニちゃんによく似た犬が祖父母宅周辺で散歩をすることは二度となかった。

犬たちの記憶に惑わされているうちに、潮風の匂いとともに視界が開けた。広大な灰色の海に圧倒され、一人なのに、おお、とか、ああ、とか言ってしまう。

犬吠埼は、義経が愛犬の若丸を置き去りにした場所だという伝説が残っている。若丸は義経を恋しがり遠吠えしたので、犬吠埼というわけだ。

見晴らしのよい高台から海岸沿いに目をやると、大きな旅館が廃業したのか、建物に黒いシートがかけられていた。そういえばここに来る途中も、水族館がひとつ潰れていた。中ではイルカが置き去りにされているらしい。

犬吠埼では海岸近くまで行くことができた。見たことのない風変わりな植物が生い茂る階段を降りていくと、地層が剝き出しになっているのが見えた。海から陸に向かって、せりだすように海岸が隆起している。白亜紀の頃の地層もあり、国の天然記念物に指定されている。

第三章

犬吠

波が強い。潮風が唸るように強く吹いて耳の中でごそごそと響く。遠吠えをするなら今だ、と思い、手すりを摑んで口を開けた。けれども黙ったまま、恥ずかしくなってすぐ閉じた。平日だが海岸は全くの無人というわけではなく、若いカップルがいたのだ。二人を脅かすわけにはいかない。それにわたし、別に犬じゃないしな。

階段をあがり、高台に戻った。犬吠テラステラスという名前の小洒落た建物の中にはいる。今年の元旦にオープンしたばかりだという。

二階の休憩スペースにハンモックがあったので、ありがたく横になった。BGMになぜかハワイアンがかかっている。スライディングギターの音を聴きながら、ところどころ白く泡立つ灰色の海を眺めてぼうっとした。犬吠埼ねぇ。犬。うぉん。

友人や上司からかわいらしい愛犬の画像なり動画なりを見せられても、ピンとこないことがある。たしかにかわいいなと思うし、そう口にする一方で、かわいいという言葉だけに収斂(しゅうれん)させきれないものをどうしても感じてしまう。

人間に愛玩されるべく洗練された犬は、まるで工業製品のようだ。愛犬家たちはその人工的な部分をのみ愛しているように感じてしまう。犬たちも好きで特定の犬種に生まれているわけでもなかろうに、かわいらしく生まれてきてしまった運命によって、従順にかわいがられざるを得ない。愛玩されるためだけに生まれてくる命と、その命を完全に支配する人間。それはとてもグロテスクな関係に思われる。もちろん犬を飼ったことがないわたしよりも、愛犬家たち

_28550179.indd 34-35 2021/07/02 13:19:21

のほうがその事実に気がついているはずだ。けれども、見て見ぬ振りをして犬をかわいがる。犬たちだって生まれてきてしまった以上、愛犬家たちにかわいがられたほうが幸せに生きることができるだろう。たとえばわたしの祖父に飼われるよりかは。

けれども犬は、時折白目を剝くし、あくびをすれば肉の色をした歯茎が剝き出しになる。糞尿は臭く、人工的な造形物にはなりきれない。犬の牙はどうしたって、肉を切り裂くためにあるとしか思えない形をしている。それはぬいぐるみのような小型犬だって同じだ。発情すれば勃起するか陰部から血を流すし、お産をすれば胎盤も弱った我が子だって食べる。機会さえあれば人間だって食べるだろう。

しかし犬のそういった姿について語られることはあまりない。そういった話はあまり上品ではないとされているし、第一かわいくないからだ。しかし『ベルカ、吠えないのか？』ではかわいいだけではない、本能が剝き出しになった犬の姿が描かれる。犬そのものが何度も露わになる。まるで表紙の犬の口腔のように。

小説には、誰もあえて話さないような見向きもされない現実が、現実以上に鮮明な現実として存在している。フィクションであっても、そこに「本当」がある。その「本当」に触れたとき、嫌悪感を示すか、膝を打つのか。「本当」だけが放つ眩しい光を、目が潰れることを承知で見据えることができるのか。その勇気がなければ、そもそも小説なんて読めないのかもしれない。

犬吠

犬の本当の姿を見据える覚悟があるか。それとも愛玩されるべく作られた部分をのみ愛すのか。どちらを幸せととるかはそれぞれが選べばいいと思う。わたしは臆病者なので勇気はなかったはずだが、運良く犬の剝き出しの姿を見たことがあった。だから『ベルカ、吠えないのか？』を楽しんで読むことができたのだと思う。

小説のことを考えているとついつい時間を忘れて熱くなってしまう。気がついたらもう日が暮れそうで、わたしは慌てて帰ることにした。銚子電鉄は本数が少ないのだ。ここからまた三時間半か。もつだろうか、腰。わたしも四足歩行だったらよかったのにな。うぉん。

参考文献

1．古川日出男『ベルカ、吠えないのか？』（文藝春秋、二〇〇五年）

_28550179.indd 36-37 2021/07/02 13:19:21

第四章

蕨、上野、亀戸、御茶ノ水

……後藤明生『挟み撃ち』

_28550179.indd 38-39 2021/07/02 13:19:21

第四章

蕨、上野、亀戸、御茶ノ水

こんなつもりではなかった。わたしはいま真っ暗闇の中、お茶の水橋に立っている。時刻は午後六時。行き交う人とよくぶつかる。橋の下に流れる川の水は、濁っているようだがよく見えない。

今日は、河口湖駅からバスに乗って天下茶屋に行くつもりだったのだ。ほうとうでも食べながら、井伏先生放屁問題について四千字書こうと思っていた。しかし台風19号がやってきて、目的地までの線路を一部覆い隠してしまった。あたりは土砂崩れの危険もあるという。それに情けないことに、低気圧のせいか頭がひどく痛むので、遠出どころではないと判断した。

ではどこへ行こう。どの本を元にして書こう。わたしは連載についての予定をメモしていたノートをぱらぱらとめくってみた。自分のことが嫌になるほど、全く予定通りになっていない。ふと、汚い字で書かれた一行に目が止まる。そうだ、後藤明生『挟み撃ち』でいつか書こうと思っていたのだ。とつぜんどこかに行くのなら、これほどぴったりの小説もないだろう。

散らかった部屋の大半を占めるプラスチックケースを、あれでもないこれでもないとやりながら『挟み撃ち』を探し出す。あった。ページをめくる。そうそう、御茶ノ水からはじまるんだよね。では御茶ノ水に行くか。読み進めていくうちに、小説は物語の結末からはじまっていたことを思い出す。そうだった。この話では到着点からそれまでの道のりを回想し、そしてその道のりでも過去を回顧するのだった。わたしは相変わらず、小説に関する記憶があやふやだ。

主人公「赤木」は、昔着ていた旧陸軍の外套をどこで失くしたのか思い出せない。思い出す

_28550179.indd 40-41 2021/07/02 13:19:21

ために、今まで自分が過ごしてきた土地を、思い出とともにたどる。まず赤木は、自宅のある草加（そうか）のマンモス団地から、ぐるっと迂回をしてかつての下宿先である蕨（わらび）へ向かう。であるならばまずは蕨へ行こうか。本来であれば、物語のはじまるマンモス団地に行ってから同じルートをたどるべきなのかもしれないが、自宅という意味では等価だと考えよう。

品川から乗り込んだ京浜東北線の電車はまっすぐ北上し、河口湖ではなく川口を過ぎていく。西川口を挟み、蕨へ。コンパクトシティ蕨。たしか成人式発祥の地なんだったか。空は白く曇り、小雨が降っている。あちらこちらの看板に錆が目立つ駅前のロータリーに立っていると、ちらほらと外国語が聞こえてきた。このあたりは多くの中国人とクルド人が、故郷をはなれて暮らしているからだろう。

以前、大学で知り合った人が、

「うちの実家にも後藤明生が来ていたはずだ」

と言っていた。実家は蕨で代々書店を経営しているのだそうだ。いいな。やはり内地出身者のほうが、そういった文学的接点が多いのだろう。身勝手な羨望を覚えたことをぼんやりと思い出す。

その後藤明生が通ったかもしれない書店に行くことも考えたが、場所がわからない。注意深く見渡したが、駅前に本屋は見当たらない。それに、それはストーカーの行うことでは？しょうがないので小説の通り、駅前の商店街をまっすぐ歩く。赤木が、とある女を『ネフスキー大通り』の娼婦「ブリュネット」に見立て、問答を繰り広げるあの場所だ。一本道はたしかに長いが、実際には複数の商店街にわかれているようだ。しばし立ち止まるが、誰も通らなかった。あきらめてしかるべき場所で右折し、蕨神社へ向かった。そこは思いがけずそれなりの規模がある神社で、七五三をすませた家族が談笑しているのが見えた。後ろからは、お宮参りをしようとする家族がいる。明確な目的のある人たちに挟まれてしまった。いたたまれず、わたしは蕨神社をあとにした。

不思議な人だったな。実家にかつて後藤明生が来ていたかもしれない人のことだ。上下色味の違うデニムを着ていたことがあった。わたしはファッションに自信のあるほうではないが、それでもその合わせかたはちょっと違うのではないかと思っていた。薄いデニムと濃いデニムの挟み撃ち。お元気ですか。

蕨の次はどこに行けばいいのだろう。アーケードの下、雨を避けながら立ち止まって読み進める。そうか、上野か。

京浜東北線に乗り込んだ。三十分ほど揺られ、上野駅に着く。公園口から降りて映画館を目指す。御徒町（おかちまち）にできたばかりのシネコンではなくて、昔からある映画館のほうだ。そこはいまやピンク映画専門なのだと知っていた。一時期、この世の全てを知りたくて、その映画館にはいってみようか逡巡したことがあった。結局はいらなかったが、それでよかったのだろうか。そういえば新橋にあったピンク映画専門の映画館は、いつのまにか無くなってしまった。わた

蕨、上野、亀戸、御茶ノ水

_28550179.indd 42-43 2021/07/02 13:19:22

しが映画館でピンク映画を観る日は来るのだろうか。
ゴッホ展の横を通り過ぎながら、しまった、赤木は不忍(しのばず)口から出たんだ、と気づく。これでは遠回りになってしまう。
「いやよいやよも好きのうち」
すれ違った男性が、連れの女性に向けて放った言葉が聞こえてしまった。どういった文脈で言ったのかとても気になる。英語ではどう言えばいいのだろう。後ろ髪を引かれるような思いで階段を降り、京成上野駅の前を通り過ぎてうろうろとしていると映画館に行き着いた。すこし奥まったところにある。立ち止まって写真を撮っていると、本来の客であろう壮年の男性にじろじろと見られた。申し訳ない。やはりここはわたしのように目的を持たない人間が来てはいけないところなのだ。
看板にはもちろん、脇毛の生えた女子高生はいなかった。というよりどの女性も、脇を強くしめているので脇毛の有無はわからない。裸体の女性と並んで、とある監督の訃報が出ていた。
赤木の通りに行動するのであれば、この近くの蕎麦屋でカレーライスを食べなければならない。だが近くのビルには中華屋や焼肉屋しかはいっていなかった。あきらめて次の場所へ行くことにした。
物語に沿うのであれば、次は亀戸(かめいど)。またもや京浜東北線に乗り、秋葉原で総武線に乗り換える。エスカレーターの場所がわからず遠回りをする羽目になる。馴染み深い両国、錦糸町の先

蕨、上野、亀戸、御茶ノ水

に亀戸がある。初めて来たとばかり思っていたが、駅前の景色に見覚えがある。そういえば前に友人を訪ねたことがあったっけ。今の今まで忘れていた。
駅前は亀戸二丁目であるようだ。ここから亀戸三丁目を目指す。だが、赤木が女のために通った昔の面影は全く残っていないのかもしれなかった。駅前にはチェーンの飲食店が乱立しており、訪れるのは亀戸であろうがなかろうがどうだってよかったのではないかという投げやりな気持ちになってくる。暮らすぶんにはよさそうだが。
大きな交差点で、わたしは思いがけないものを目にした。なんとそれは豆屋だ！　煎った豆を売っている。これは赤木が若い頃に南京豆を、再訪時にはそら豆を買った豆屋ではないか。いや、まさに！　まさか豆屋が残っているとは。わたしは豆屋の頼もしさに、今にも笑いださんばかりに興奮した。あはは、豆屋が残っているなんてね。笑顔で何枚も写真を撮るわたしを、店先にいた女性が怪訝そうな顔で見つめている。南京豆はピーナッツという名前で売られていた。このあたりが三丁目に違いない。
ところがあたりは四丁目だった。右を見ても、左を見ても、前を見ても、後ろを見ても、そこは亀戸四丁目。わたしは四方を亀戸四丁目に挟まれていた。先ほどまでいたところは二丁目だったのに。えーっ。わたしはなにかに化かされたのかと思い、慌てて地図を確認した。なんのことはない、三丁目は四丁目の西側にあっただけのことである。
その後は順調に竜眼寺、栗原橋、長寿寺、天神橋の前を通った。もちろん作中には出てこな

_28550179.indd 44-45 2021/07/02 13:19:22

いスカイツリーには雲がかかり、まるでそこにあるのが不自然であることを自ら主張しているようにも思える。歩きながら読み返すと、永井荷風『墨東綺譚』に関する記述が出てきていることに気がつく。すっかり忘れていたのは、初読時には『墨東綺譚』を読んだことがなかったからだろう。奇しくも第二章のテーマは『墨東綺譚』。この章は第四章だから、第三章は『墨東綺譚』に挟まれたことになる。後藤明生に誓って言うが、これは本当にわざとではない。

赤木の足跡をたどるのであれば、ここからまた蕨にとばないといけない。でもさすがにもう疲れたよ。考えてみれば、話としては必要だけれども、展開としては無理があるようにも思える。実際に作中の足跡をたどってみると、そんなことまで見えてくるのか。

歩いていると錦糸町に着いた。ここから御茶ノ水まで総武線で一本だ。たくさん歩いて疲れていたので、空いている座席に滑り込むようにして座る。両側には大柄で髭の生えた外国人がいた。香水と体臭が混ざり合い、なんとも言えない臭いがする。左側の男性は、着ている上っ張りが短いのか、腰から尻のすぐ上までの地肌が丸出しになっていた。ふとした折に彼の腕がわたしの肩なり顔なりに当たる。右側の男性も、なにやら顔がとても近い。とんだ二人に挟まれてしまった。彼らはまるでわたしなんかいないかのように、大声で話し合っている。これはもしやロシア語では？　わたしは当然のように、二人にピョートルとニコライと名付けほくそ笑む。会話の端々に「ミタカ」「アサクサバシ」という地名だけが聞こえてきた。果たして彼らは目的地にたどり着けるのだろうか。

蕨、上野、亀戸、御茶ノ水

秋葉原の次は、ついに御茶ノ水である。電車を降りるとわたしは耐えきれず駆け出した。そうして改札を出た。お茶の水橋！　ようやっとたどり着いた。これでわたしの巡礼の旅も終わりだ。だが最後にやり残したことがあることに気がつき、わたしはiPhoneを取り出した。そして、知り合いの山川さんに電話をかけた。

「あ、もしもし。久しぶり。あのさ、昔のことなんだけど。雑司が谷の古本屋で後藤明生のサインがはいった『挟み撃ち』を見たことがあったんだよね。もちろん買おうと思ったんだけど、その時手持ちが千円なくてさ。本の金額はたしか二千円ちょっとだったと思う。その古本屋はクレジットカードが使えなくて、次来た時に買いますって言って帰った。その次の土日に行ったらさ、もう売れてしまっていたんだよね。後藤明生のサイン入りの『挟み撃ち』がさ。すごく悔しかった。

それからね、『情熱大陸』で角田光代が出ていたときに、後藤明生のサイン本を見せていたんだ。あ！　わたしが買おうとしたやつ！って思った、っていう記憶があるんだけど、角田光代の『情熱大陸』は二〇〇五年放送だから、明らかにサイン本を見つけたときより前なんだよね。わたしが北海道にいたときなんだから。変だよね。それに古本屋の店員さんは大学の英語の先生に瓜二つでさ。もしかしたら姉妹だったのかな。わたしはその二人にずっと挟まれたまま暮らしていたのかな。ねぇ、どうなんだと思う？」

山川さんはすこし経ってからこう言った。

_28550179.indd　46-47　　2021/07/02　13:19:22

「すみません、誰ですか」

わたしは黙った。そしてそのまま電話を切った。わたしはお茶の水橋の真ん中で、iPhoneを片手にいつまでも立っていた。次にどこに行けばいいのか、誰と会えばいいのか。わたしは何もわからなかった。

参考文献

1. 後藤明生『挟み撃ち』（講談社文芸文庫、一九九八年）

第四章

蕨、上野、亀戸、御茶ノ水

_28550179.indd 48-49 2021/07/02 13:19:22

著者プロフィール

わかしょ文庫（わかしょぶんこ）

一九九一年北海道生まれ。作家。

うろん紀行

二〇二一年八月二〇日　初版第一刷発行

著　者　わかしょ文庫（文・写真）
発行人　友田とん
発行所　代わりに読む人
東京都目黒区中央町一－一四－一一－二〇二
Email: contact@kawariniyomuhito.com
Web: https://www.kawariniyomuhito.com

装　画　高田綾菜
装　幀　コバヤシタケシ
校　正　サワラギ校正部
（北村さわこ・松井亜衣・柳沼雄汰・窪田瞭）
印刷製本　藤原印刷株式会社

乱丁・落丁本はご面倒ですが当方までお送りください。
送料当方負担にてお取り替えいたします。
ご意見・ご感想などは contact@kawariniyomuhito.com までお寄せください。
今後の出版活動の参考にさせていただきます。

© Wakasho Bunko 2021, Printed in Japan
ISBN 978-4-9910743-3-2 C0093

_28550179.indd　200-201　　2021/07/02　13:19:40